ミオヤの光

性起の巻

萬有生起論……一
性起と緣起……九
緣起論……一三
衆生性緣起論……二三
遠心力と求心力……二七
三性……三〇
無明……三四
還相……三六
世界觀二面……三八
三性……四一

萬有生起論（萬有生起論）

宇宙萬有は云何なる者の手によりて成立せしものなるかを論ず。萬有生起の論につきては古來唯物論の見解あり唯心論あり唯理論あり。

斯教は法身に一切知と一切能との屬性ありて天則秩序に一切を開展し生產せるものとす。外觀には相待的因緣因果の律として成立す。

唯物論者は、自然現象の中には生物の精神の如き一種奇異の質を現する物有れど其は物質の變態に過ぎず、宇宙の本質は唯物にして此に自然律がありて物理的に萬有は構成せらる、故に萬有の生起は唯物質の自然律に萬有を生起すべき性能ありとの見解なり。唯心論者は宇宙の本質は觀念的にして物質は唯現象のみと、故に萬有の生起は唯心の所作なりと。唯理論者は眞如法性の理によりて萬物は成立せらるると。

一

支那儒道の二教は人の原因を說明するに、近くは父母及び人類の祖先を原因とし遠くは大道元氣自然の法によりて天地萬有を生起すと。斯二教の如きは單に萬有の生起を研究するに形氣の方面のみに局るが如し。

猶太基教には超自然の天父ありて自然萬有は其神意に由て生起す。神意を注ぐが故に萬物あり。被造物には自由を得ざるものとす。

佛教に於て教に淺深あり、不了あり、不了義教は未だ萬有生起の一大原因を究めず唯圓滿なる了教に於て全く生起の原理を盡せり。

若し佛教の淺教によれば萬有生起の原因は各自の個々の業卽カルマなり。各自の業作が各自を造る因にして自の業力か自己の身心を造る。また此世界は一切の生類か共同の業力の所感なりとす。

唯識論によれば各自のアラヤ識を根本とす。アラヤ識は色心萬法を包含して、此識によりて見分相分卽ち主觀の精神も客觀の物象も悉く唯識の所變なり。此識無始以來暴流して生死に轉展す。萬有の生起はアラヤ識なりとなり。

今曰く唯物論者の萬有の生起の原因を唯物に歸せば無は有を生せずの理に基かば物質を原因として精神てふ結果いかにして生せん。今人類の身に就て檢せんにも物質の身體の運動知覺は精神に因て然るが如く觀じらる。然らば萬有の生起を物質に歸するよりは寧ろ精神に歸するに如かざるが如し。

儒道が元氣自然の道法を以て萬物生起の原因とせば元氣よりして人の內的生活の精神的原理知情意の如きの原理を說明し得るか。また自然にして生ずとせば萬有には必ず因緣果報の相互の關係ありて自然に生起すとの理を明めず。故に大道元氣を體として自然より生起すとの說は未だ生起の原因を說明するに足らず。

猶太基督二教の神意生起原因論は神にのみ意ありて直接造化し萬有には生起の原因あらずとせば一切の有機物各自に生起の作用によらずして直ちに神の造作を發見する能はず。故に個々の罪惡も神に歸せざるを得ず。故に神惡論起る。斯說も亦生起の原

二

三

因を究めず。

佛教小乘教は萬有が各自自己の業力を生起の原因とし業力の體を明さず。力は體による體なくして力ある理あらんや。唯識家は業力の源なる體あり卽ちアラヤ識を原因とす。然るに小乘の業力と唯識のアラヤを原因とするは自己の個體を原因として個體の根柢だる一大本體を明さず。個人と及び世界には此が根柢なる一大本體なかるべからず。此本體を明して萬有生起の理を究竟せるものは圓滿の教なりとす。キリスト教の萬物の體たる神と小乘教の各個の業力とを統一し綜合したる大乘佛教によりて始めて究竟せり。

華嚴密教等は圓滿教に屬す。若し華嚴によれば萬有生起は如來藏性が總該萬有心卽ち一大精神が萬有の本體にして此を一心界と云ふ。此に隨緣不變の二面ありて、一面は常住不動の眞如の體にして一方は隨緣の活動。萬有は眞如自性を守らざるが故に衆生界に轉じて個々の心識となる。是を衆生心と名づく、衆生心は全體心を根柢とす。衆生心能く一切萬有を造作す。經に心は譬へば工なる畫師の如く能く諸の世間を畫き五蘊悉く生す。若し人の心行が普く諸の世間を造るを知らば是人は卽ち佛を見佛の眞實性をなしたるもの也。何となれば心と佛と衆生とは此三差別無ければなり。又曰く三界を了達するは心に依りて也。十二因緣復亦然り。生死皆心より作す所、心若し滅すれば生死盡く。

若し密教によれば宇宙を構成する一切の物心二質は本色心不二の大日金胎不二の大日六大周偏して宇宙常に常恒不斷の大日の所作ならざるはなし。全體神が大大日なれば一轉したる個々は其一分なれば一々皆大日ならざるはなし。各個の小大日は本大日を本體として不可離の關係を以て大大日が萬有の本體にして萬有生起の源なれば小大日焉んぞ其作用なからん。宇宙全體は大日にして其分たる太陽系も小大日なり地球も大日にして地上の生物各大日の色心ならざるはなし。故に萬有生起は各小造化なりとす。一切衆生自己大日たることを自から覺らず自ら三界六道を造りて自から苦樂の夢

を感ず。

今曰く宇宙唯一の法身の手によりて成生したる萬有なれば大は宇宙全體より太陽も地球も所有萬物もいかに微細なるも一切の個體は一大法身の分身なる個々なれば一々個々は小法身なり。斯小法身は不可思議の妙用ありて各小造化なり。大法身の法則に則りて其分に應じて造化の知能を有せり。太陽は太陽の造化の用あり地球もまた造化たり各個々もまたいか成る么少の生物にも具有せり。然れども法身の理を離れては太陽と雖も造物の用あるなし。此天則に則る限りに於ては么少の生物もまた造物の一員として而も小造化なり。人類の生殖の作用を外にして人は生起すべきものに非ず。一切の動物に於ても植物に於ても各自は其元形質に自己の族種を生起すべき本能を有せり。故に各個體は天則に則りて各自小造化なりとす。各個體は自己に四支五官を自造し自ら活動し自ら生存するの作用を有し、自ら視聽嗅味し自ら知覺し運動し經營するの妙用を有せり。自ら食ひ養ひ生殖の用をなす。しからば有る人が個法身の萬物いかに微細なるも神を宿し能はざるほどの微細なるものはなしと。

質料と秩序と作用

法身如來藏卽ち一大精神に一切知一切能の權能ありて萬有を生産せりと。

宇宙は絕對心靈にして絕對觀念と理性と意志との精神態によりて萬有を生起すと。

萬有を構成する六大性は本然とし周偏す。卽ち物と心との大元素が法界に存在し業に循ひ緣に隨て萬有を變作す。六大とは如來藏心の二屬性絕對觀念と絕對意志と卽ち一切知と能となり。一切の色心の二象は本絕對觀念の相待的現象にして其萬物の堅濕煖動は觀念の客觀が意力によりて活動する現象なりとす。

萬有の質糧は客觀々念態にして意力によりて堅濕煖動等の作用をなす。一切知と能によりて萬有を建設し一切知は萬有に內存し天則秩序として時間空間の形式に因緣律

に規定し、大にしては天體の星宿の成生及び運動に皆秩序の整然たるありて地上の萬物起伏生滅に至る。

自然界は客觀々念が意力に實現せられるゝに一切知と能とによりて世界を建設すと云ふ如く、一切知とは一切作なり。いかにとなれば法身の一切知は一切萬有に內存して萬有造化の觀念が一切を造作し之を造作する絕對意志の爲に司命者として秩序を整束す。一切知は天則秩序の理性として萬有に含蓄し萬物を統一し宇宙全體が全一の身體にして萬有卽ち自己なれば法身一切知は萬有の世に在つて萬有を造化す。

萬有は表面には個々孤立的に觀ゆるも根柢に於て統一的理性あり。故に統一的系統ありて萬有は不可離の關係を有す。

萬有が統一的理性を根柢とするが故に宇宙全體の力に依らざれば萬物は生起すること能はず。總體としての宇宙は空間に無限に時間に無限永久自動自活自養と消耗とは共に自己にありて天則的に常恒に建設的衝合行はる。永久自動自活して無窮なり。空間を盡して遺すことなく時間を窮めて休止することなく造化の妙用を施す。

譬へば人の精神に理性完全せざれば造化建設に秩序の全を得ざるが如く、自然界の萬有の生起には最も完全なる理性なかりせば爲し能はざる巧妙を以て生物を造作す。大にして天體の星宿より小にして地上の微少なる植物の根莖枝の末端に至るまで其完全たる造作の巧妙に至つては一切萬有に存する理性智の存在を否定し得ざるべし。また一切の萬有の生起には自活自發的にして自己に其形式を形成す。其形は外部よりの規定を待たず。萬有を造化し生起する法身の妙用は其秩序の整然たる盲目的運動の結果の如くなる形跡毫も發見すること能はず。由此之を觀れば藏心に一切知一切能の理性存在を謝せざるべからず。

性起と緣起

萬有生起を說明するに全體より見れば萬有に各自を統制的に自發的自ら形成せる性能存せり。之を性起と云ふ。詳く說明せば萬有は自己に本能に自己を形成し統制し自己を造るに自發的自活的の性能ありて外部によらず緣を待たずして而も自ら成制するの性能あるものとす。例せば植物の種子に自己の原形質より生產し增長し自己の形を作り根莖枝葉に至るまで、外界の其摸塑によりし形成せられたるに非ず、其換塑は自己にありて自發的に自己の本能より自己の伏能を開發し自己の天性を發展する性を有すること、また人類にしては人の初めて姙りたる胎兒に人類としての四支五臟六腑の機官より乃至其官能より精神能力に至るまで自己に之を成形しまた智力情意の顯動すべき性能を自己に有せり。其本能の伏藏は外界より之を形成すべきにあらず。性起の理を進化說に應用せば人類の元祖は他の高等動物より進化し高等動物は劣等動物より乃至展轉して生物原始に遡る時は實に么少の生物なり、凭る微少なる生物より性起して無數の階級を經て進化したる人類なりとば、彼の原始生物に已に人類と成り得べき本性を伏藏せるものと言ふも不可なかるべし、然らば乃ち人類にして心靈開展せば聖者佛陀と成り得べき本性か生物の性に伏せるものと爲すも否定すべからず。

萬有は內性自發的にして外部より之を形成し變度すべきにあらざれども、また外部より之を養成すべき助成機關を與へさる時は生起すべき能はず、之を因緣論とす。

因緣論

萬有は自己に自活自發的形成の性能あるも、自然界の萬有は因緣所生の法、物獨り成立せず必ず相待規定を免れず、因緣により相待て成立す。大にして天體の地球は太陽系に繫れる一切の惑星相互の關聯を離れて獨り存在すべからず。此太陽系は又他の太陽系と連絡し因緣相絡りて空間に遍在し時間的には因果相繫りて永久に相續し、また地上の物は太陽力の因緣を離れて一個の生物も生存すること能はず。

一個の植物にしても雌雄の因緣を離れて能なく、また植物の種子を造化する能はず

また植物の種子あるも土地と水と熱との資緣を缺ぐ時は生ずること能はず。

すべての動物は植物との因緣營養によらざれば生存する能はず。地上の萬物は相互に因緣相待つて相資け相成す。之れを因緣所生の法と名づく。因緣より成るものは時間に必ず結果生ず。一の植物の雌雄の因緣相寄りて其結果として其種子を成す。また種子を元因として萠發し根莖枝葉の花咲き果を結ぶは是結果なり。斯の如く因緣因果の關係は萬有生起の緣によりて種々に變化す。此に依て因緣論起る。

緣起論

如來藏心てふ宇宙全體が物心不二の絶對心靈態である。全一の心に意志と寫象との二屬性を有す（人の精神に知覺と運動とある如く）。藏心の絶對より相待の自然界を現出せるには二屬性意志と寫象は是一切能と一切知となり。一切能は一切物質を運動生活々動せしむる用あり。此二性は宇宙全體に亘りて徧せざるなし。萬物を生活々動せしむるは能力にて萬物を成立する秩序を整へ條理をなすは一切知なり。視よ大にして天體の星宿循環運動より小にして地上の有機物動植物の生理悉く理論的に條理を齊て各有機性を備へ生活々動す。是悉く其本源は藏心一切知と能とが徧滿すればなり。

藏性絶對より相待の世界に發展せんに秩序をなす一切知は離れざるも先づ一切能の力にて絶對より相待に向て發展せられたり。（本より末に向て、本體より現象に向て）

起信に眞如生滅に緣起の相を演べて心生滅とは如來藏に依るが故に生滅の心あり不生不滅の眞性と生滅の性と和合して非一非異なるを阿梨耶識と名づく。記に、不生滅の藏性が無明の風に因つて動じて生滅と作る。不動の水が風の爲に吹れて動水と作る。動靜殊と雖も水體是一。自性淸淨心が無明の風に因て動じて生滅と作る。生滅の萬有には別に體あるに非ず。不生滅の藏性が體として無明に因て生滅と爲る

無明は倒執は浪を起す猛風の水に非ず浪に非ざるが如く無明は本其體なしと。

無明何に依て起る。

古來無明と本體との區別確乎として認める說なきがごとし。

今曰く、藏性は宇宙本體物心無碍の心態にて其屬性一切能卽ち一大意力が相待自然界に向て發展產出する能力なり。動じて生滅と爲す力なり。本來意力は不識的にして運動せしむる性なり。力なるものは運動を掌る能の故に。然れども絶對には兩性離れざるが故に一切知伴はざるなし。是萬物に條理の存する所以なり。能展なる藏性は無明なる盲動にあらず。若し能展なる藏性にして一切知有せざらんが所展なる萬物に秩序も條理の性も存する無けん。然るに萬有悉く秩序あるは是藏性が盲動にあらざる證なり。

所展たる自然界の萬物は卽ち藏性より產出されたる子なり。子は親の如く知はあるも潛伏能なり。故に子の方に一切知の分賦たる知が伏能にて一切能の分たる不識意志の運動のみ活動するを無明と云ひ。無明とは衆生が有する生理衝動の事なり。

信論の藏性を動かす無明の風と云ふ。絶對の藏性に何れよりか無明と云ふ風が發すべきか。其發動の處を發見すること能はずして古來妄霧の裡に彼は形を隱せり。

今曰く、其無明は佗より發したる風にあらず、絶對心の屬性たる一切能力卽ち意力なり。不識運動の性なり。此能力が萬有を發展し運動し活動せしむる原動と成るなり絶對心の屬性である人の運動活動意志と同じ物なり。

人の知覺も運動も其性は異にすれども同一の精神の屬である。精神も意識的のみに

あらず不識的精神あり。

今宇宙全一の徧動力一切能が不識的に常恒に運動し世界と發展し世界より三展して生物界と轉じて生活々運す。悉く絶對意志の分運動に外ならず。

第二展、世界相待性

信論に、不生滅の眞心と生滅の妄心と合したるをアリヤ識と名くと。

本來の全心が無明の風に動せらんて向末隨緣して生滅の世界と現出せしなり。

信論には第二の相待世界性を立てず第三の衆生性を論じ、衆生性がアリヤである。

今は第一の神は絶對實性なれども一展せられたる世界自然界は卽ち相待的に因緣因果の關係を以て萬物規定す。絶對は時間空間に超絶なり。展せられたる世界は相待的時間に三世乃至十世を爲し空間に四方上下等の十方を立つ。之を世界性と云ひ卽ち時間空間の形式に相互に相待的の關係を以て萬有成立するの謂なり。

視よ天體が横に空間を盡して有ゆる星辰が相關して網狀をなして列羅せるは之と因緣の相關にしてまた過去の際より此世界の星宿は因果的に先後開避し交迭して鎖狀の聯絡をなし、萬有は本體の全一根柢の上に立てる萬物なれば相互の相卽と能力の相入とは相離るゝと能はずして世界をなす。

物心二現

全心の二屬性、意志と寫象、一切知と能とは世界の物質心質との二面に現じ意力は物體を運動し活動し生活せしむる能力とし、知は內的生活のすべてを掌る。

唯物唯心は生產と歸越

全一の二屬性が世界に現じて二象と爲りて主觀客觀、卽ち物質と精神、外的と內的となる。

一切能は萬物の物質運動の力卽ちエネルギとして萬物に存在して運動をなす。一切

知は萬物に存して秩序をなす。古來唯物論者は一切能の方面なる物體中のエネルギの實在を信じ宇宙の本體は物的にしてエネルギーのみ存すと。宇宙を一切能の方面より論ずるを唯物論とす。

內的生活の寫象の方面に卽ち一切知の方に重きを成して宇宙の體を論ずるものを唯心主義と云ふ。

支那道儒二敎も唯物主義と同じく宇宙本體萬物の生起を自然道法一大元氣と云ふ。一大元氣より陰陽の二性と成り乃至一切萬物を發生すと。

一大元氣とは全體心の一切能卽ち不識意志に外ならず。唯物論者と同一觀念なり

宗密禪師は此道儒の發生に對して一大元氣自然に則りて萬物を生成すとなれども、萬有の生成は必ず因緣因果の關係を離れて生ずべきにあらず、亦萬物生起の元由を說明せんには必ず因緣と因果の則に本つきて研究せざるべからず。然るに道儒二敎は因緣の理を無視して發生を說く故に實は萬物の生起を明にする說にあらずとなり。

唯物家は萬物が發現生成する方面に重きを置き生物の生理的生活を本となして宇宙を說明す。吾人が生產門の方に唯心家は精神生活が重をなし宇宙の終局歸趣を旨として其觀念を以て宇宙を觀じ自然と唯心論となる。

唯物家は宇宙が現に萬有を生成せしむる生理の生活は物質卽ち能力が本なれば、其本源なる宇宙の本體もまた吾人の身體と同じく唯物質的原子のみならんと。唯心家は人生の目的は心靈が永遠不滅の神の國を期して生存するものなれば宇宙は吾人の希望を充す心靈を以て本質とすと。

今曰く、此兩主義は甲は一切能の萬物を發現する方面を說き、乙は一切知により神の本質に歸するには知光によりて歸本すべき方を論ず。生產歸趣の兩面を分擔したるに外ならず。

第一の藏性と第二の因緣性とを區別し

五蘊、六人、十二處、十八界、地水火風空識見、の七大は此相待の自然に於て一切

衆生界を能造する處の元素なり。此元素は本來宇宙に存在して、此元素が自然律により因果に規定せられて一切の階級に亘る。草木または動物を造作する。要素は本來普徧性にてあれは此要素は何人も之を需用することを得べきなれども、自然法と因緣の關係によりて同一の元素を以て被造物の生物と成りては十人は十人百人は百人種々の性質相貌等を特殊的に成す。

斯らば世界自然の生物を造作すべき元素は本來世界相待の現象するものゝ、其本元に歸一する時は、如來藏性妙眞如の性、本然として法界に周徧し、湛然淸淨の性にして因緣と自然より成りしものに非ず、自性本然の性が寧無方所但だ循業隨緣の發現なりと。

今曰く、第一の本來淸淨の如來藏眞如性が相待世界に現象して、五陰六入十二處十八界七大性の第二因緣性と現する第二の普徧性が、第三の衆生性は五陰の身も心も乃至地水等の同一の七大性等の身心を造作する要素を以て、種々の因緣の關係上、植物界にも種々の階級科種類となり同種の植物にても個々各別々の相狀となり、また動物にも人類にも同人種に身體の相貌性質等悉く特殊的に形成せられて一として同一なるはなし。是複雜なる因緣の關係によりてなり。

楞嚴に三性を區別せざるも、自から絕對本然の眞性が循業發現の世界五陰七大性となり、此が要素として衆生界に造られし事分明なり。然ども楞嚴は本五陰等の現象性を分別妄執として之を排除し、進て本來の第一義を發悟せんとの目的より說きしものなればなり。

此の五陰乃至七大性等は物心の二性に歸す。

楞嚴は此五陰六入十二處十八界七大等は因緣和合虛妄に生有り、因緣別離すれば虛妄の名滅、生滅去來は其實は本如來藏常住本有不動周圓妙眞如性眞常の中に去來迷悟生死を求むるに了に得べからず。

楞嚴に、阿難が是義を問ふ。世尊よ曾て楞伽山にて大慧等の爲に斯義を敷演し玉ふ

彼外道等は自然の法に本づきて說明す。なれども我は因緣を說く。彼境界に非ずと。然るに今本覺の性は本有自然にして非生非滅と。一切虛妄顚倒を遠離せよと。因緣に非ずとすれば彼自然と何ぞ異ならん。

佛の答ふ意は、第一の絕對眞性を因緣所成に非ずと云ふものの、彼らは世界の萬有を自然と說く。故に萬物は因緣の所成と見ゆるに非ずと云ふ。今いはゆる本然とは萬物を絕したる本然の眞性を指したるなり。故に藏性妙眞如性は自然に非して因緣所成に非ず本有の妙性なり。

今學語の便利上世間に自然と云ふ世界因緣所現の萬有につきて、今もまた自然律は必ず因緣因果の規定を離れず此自然法因果律は第三世性を說明する學語より今も隨順して用ゆ。

自然が自然の要素を以て萬有を造作するに因果律に成立し此因果の上に第三の衆生性が三展す。

衆生性の緣起論

衆生性は極少より發生す

今暫く現世界の分たる地球上の生物發生の原始を進化說によりて見れば極めて微少なる最微少なるアミンバを以て發生の原とすと。

單細胞其元素も單純。

一切衆生は最大絕待なる神性の分現とすれば極大なる神は自己の分子を原始に何故に極少とせし哉、答へて、神意測り難し極少より漸次進化し極大に協はしめん爲の順序不可思議。然れどもいかに原始の生物が微少なるも神意の微に比せば較ぶべからず、有形の極微は無形の心質を宿すに　近す。

生物進化の原則

生物が原始の極微極劣極素より向上し進化するに因縁に生物自身に同自性として神の分子たる靈性具有せり。一切知の分たるとまた一切能の分を有せり。此靈性潛伏が自發的向上の因縁となりまた宇宙に萬有の自性を發達せしめてついに攝取せんとの求心力存せり。之が縁力となり自己の靈性伏藏が顯動態に爲らんとの勢能と神の求心力との因縁によりて萬物は進化す。

此進化の過程は人間個人の考より見れば實に極少なる生物より無數の時間と階級を經て神人合一の時期に達する時間をいかにか減縮して之が目的を達せしめば可ならんとおもふも、斯廣大なる設備を以て順序を經るは自然因果の規定にして之を潛越すること能はず。

生物進化の元理は靈的伏性を顯動せんとの自發的なる萬物相互の競爭とまた神の求心力との因縁によるものとす。

一切知と能

神性より三展したる衆生性は神が萬物を現象界に發展するは一切能力エネルギなり神には本より無明なく一切知一切能との理を以て萬物自存として造化す。所展の子は一切知の分たる知性は伏藏して物理的の生活を爲す。一切能の分が先づ發動す。されば原始の生物また胎兒も不識意志の働ありて生存す。

人もまた生れて幼稚の時代は不識的に生活運動す。內的生活の精神は漸次に發達す感覺にても觸覺等が先に働き何にしても肉の生活の便利と生理の則に則りて發達するごとし。感覺知覺感情理性等他の動物と共通性なるは先に發達し人間的の要素なる精神は漸次に后に發達す。

物理的の身體生活は手段にして一切知の分たる靈知開發して神の本性に向ふて進む

は目的なり。

世界及衆生の發生せる時は知は伏能にて能力は先發動し、能に知は隨順す。されば一切の生物が未だ靈性開發せざるほどは只肉の生活の爲に全力を盡くし、知は只肉の生活を計るに過ぎず。故に衆生的の知にして靈知にあらず。

不識意志の生活よりまた人類の肉の生活意志は神の一切能力にして是を生理衝動と云ふ。一切の生物が自己を保存せんとの勢力なり。卽ち活きんとの氣、是が人類の進化、肉の我、生理の我、自己の保存の養分もまた生殖の作用も悉く生理の本能として存す。

大にして一切能一展して天地陰陽の元氣となり三展して生物の生理衝動として大より小悉く一面より觀れば宇宙一切の生物を生理的に生存せしむる能力の存在するを見る是唯物論または元氣陰陽論との主義とする處是また手段として最も必要なり。故に此方面に重きを爲す論者は生殖作用を神聖視し神の掟とし造化の妙用とす。是また理なきに非ず。然れども若し神の目的たる靈性開發し永遠光明に歸する道を未だ意識せざるはいまだ階段にして宇宙及び自己靈性の伏在を認さるは遺憾なり。

亦一方に神の眞性に歸復するを重視して手段の生理を蔑視し、生殖は罪惡の根本なり愛欲は輪回の源、此を根本に脫却せされば生死を脫する能はずてふ論者もまた圓滿なる說といふべからず。然れども手段を神聖として高等に進んが爲にすと、また目的を輕視せば衆生は生々輪回を脫する能ぼすてふ方よりの方便として說くとせば可ならん。

無明及び煩惱とは未だ知性開顯せざる生理衝動に名づけたるなり。宋儒は形氣と名けたり。

遠心力と求心力

神の一切能によりて二展三展したる生物は自己の肉我を中心として我愛執藏等の自我を愛し生物自然の常規は自己を中心として自己の生活に利ならば之を求め不利の敵には抵抗しまた恐怖しすべて利己愛我主義なるすべて生物の通性なり。其自我なるものは生理上の我なり。肉の生活を目的とし自然世界の上に自己の利を獲んとす。

故に自然と本源の絶對無我の眞理に合一せん爲め高等なる靈性は未顯なれば、無明卽ち生理衝動主義は飽までに此肉我を保存せんとの主義目的なれば、自ら大我に投歸せんとの意志無し。大我は常恒に一方に世界に發展する力とまた一面には攝取　光明卽ち求心力を法界に普及して解脫し度生して本覺の光明に攝取せんと爲す。

肉我中心の生物は此に對して反抗の意味を以て盲目的に小我の目的に向て盲動す。此生理衝動は手段としては或程度までは遠心力を以て自我發達を目的として進行せざるべからず。生理生活の自我にして完全に發達せざれば靈的生活の方面を開發せんにも圓滿なる能はざればなり。自我中心の絶對に對する自然の遠心力ばまた性の然らしむるならん。

微少なる生物より進化して高等なる人類に進みしも皆この自我愛の遠心力によりてなり。外的生活が完全に達せるときは遠心力を以て求心力に抗抵するは處女が或年齡の時期に達する迄は雄性を拒むと云ふごとし。

生理我が完全に發達して精神が或程度に進化する時は自己の內的靈性が機會だに捕捉すれば自發せんとの靈的衝動神的憧憬として灰かに面目を現さんとす。

之は內に神の分子たる靈性豫め具備して、其手段階級として身體組織的の頭腦も圓滿に成熟し、外に求心力の性が充滿し、之れが世界に發現しては佛陀の福音宗敎としても世に流行す。此世に行はるゝ宗敎卽ち如來求心の具體的現象なり。有佛無佛性相常住にて假令世に佛敎が言語文字の間に行はれざるも眞理は本來常住なり。

宇宙に其靈的光明の力は充滿することは宗敎的三昧の修行爲すものの經驗する處、求心力とは大我なる如來が衆生の靈性を開發して神の自己の本に復して眞理に稱ふ靈

の生活をなさしめんとの理性なり。神の求心に應じて自己を投歸すと云ふも敢へて此肉體を亡して靈性に入との謂に非ず。只須らく自己の伏藏靈性を開發し、靈の光によりて自己を發悟し、自己は如來の靈によりての我なるを認め、此靈我は絶對にして此彼なく永恒本然にて生滅なきを悟り、而して此靈の光明發せんか此光明によりて卽ち一切能よりの分たる自己の生理生活を指導し訓練し靈化して神の中に生活するが之れ此神の求心に應じたる生活なり。今は理想に於て神の光明中の靈我となる、然れども此形はまた世界の相待規定の約束を悉く脫すること能はず。卽ち此形ば養分を攝せざれば生活する能はず、此の肉の命盡る時は實際の靈界に靈入す。是なん求心に全然應じたるなり卽ち神と一體に歸するなり。

三　性

地上に於て生物進化の過程を見るに進化の目的は物質生活より精神の方面に在るが如し。原始生物乃至劣等物は一切能の分たるの生活のみにて活動し漸次に進んで感覺等も發達す。高等なる動物の感覺は能く發達す。また運動も發達す。尙ろ人類の及ばざる處なり。然れども知の分たる知性は未だ顯動せず。人類に至て益知性か發達す。知に導るゝ能力は意志もまた巧妙なり高尙なり。生類が最高點に達したりと爲す人類もまた動物なれば動物と共通の性を有す。然れども人類また特獨の點あり。

性相學者が人類の性相を三階に區別して、

一天性二理性三靈樞性と。

人類の頭腦及面を三分し三階級として兩眼の位より下を下級とし之を天性と爲し、兩眼より額の中位に至るを中級卽ち理性と云ひ、額の中より上部を上位とし靈樞性とし、天性は一切動物共通の性にして卽ち生理的生活を掌る感覺及び營養に關しての心作用は人類のみに拘はらず動物共通の性。中位なる理性は獨り人類に於て發展し推理

判斷觀察の心理作用は他の動物には有せざる處。若し此理性にして缺乏發展せざる人は常識に疎くすべて人間的智惠の完き能はず。上位靈樞性は人類が人間以上の神と精神的に交渉し感應し此宗教的關係によりて永恒の生命をも得らるものなり。

人類が此三性平均に完全圓滿なる人は最も圓滿なる人格と云ふべし。若し天性にして不備なる時は形體上の不具者にしてまた缺損する時は身體不健康にして形體上の生活に耐えず。然れども動物共通性の偏的に發達して中上の二性が缺乏する時は人道豫備もなく常識もなく同情もなく唯動物慾のみ强く殘酷なることも敢てするに至る。また理性は完全にしてまた能く發達すれども靈樞性に於て缺少し發達せざれば、人間としては能く完全なる人格を備へ能く事理に通達するも宗教の絶對的神靈なる神を信じ神を愛し融合する如きは不能なり。

前二性は一切能に本づきて伏能の理性發達して手段としては既に達したるも靈樞性開發して始めて目的を達する性なりと云ふべし。

衆生性の中の人類の有する此三性中天性は個人卽ち自己の外的生活を爲すの人、自己と唯動物と同じきことを證すに過ぎず。理性は自己と自然界卽ち世界的性と通じ、理性はすべて理系に於て萬物共通の理をも解し因果的の形式をも判斷することを得。故に自然科學の知識等は此理性に於て意識することを得。故に理性は因緣因果律にて時間空間の形式に行はるる範圍の事理は理解し信認することを得るの性なり。依他卽ち世界性を開發したる性なり。靈樞性は自然現象相對的の事理を認識するに止まらず絶對なる神の性に合一し信認することを得。故に此靈樞性開發したる人は神と共に在りて其精神に絶對無限なる神と融合し美妙不可思議の光明的精神となる。故に之に到る人は卽ち人格上の靈格なり。斯性の人は自己の最根底なる神に受けたる性が開發して衆生に在りて衆生にあらず世界に在りて世界を依止とする人にあらざるなり。靈格として絶對世界に依止する性格なりと爲す。

無明（三細）

起信義記に、夫心性は離念本不生不滅、而も無明有て自の心體に迷て寂靜の性に違し鼓動して念を起し生滅の四相あり。是故に無明の風力に由て能く心體と生住異滅して細より麁に至らしむ。經に佛性隨流して種々の　と成ると。亦法身が諸煩惱の爲に漂動せられて生死に往來するを衆生と爲すと。無明が心體を生住異滅せしむる始生相を名けて業相と爲す。無明不覺の心動するに依つて起滅ありと雖も、相分未だ分たず無明の力を以ての故に彼の淨心を轉じて最微なる生相と爲す。甚深微細唯佛の知る所

四相の中生相の微細にて菩薩不知所。經に曰く、菩薩知終不知始、唯佛始終俱知、始とは生相なり。無明不覺の力に因て知相等の種々夢念を起し其心源を動じて轉じて滅相に至り、長く三界に眠て六道に流轉す。

今曰く、無明の力を以ての故に淨心を轉じて世界三　に現ずと云ふ如きは。無明の力とは如來藏性よりかはた佗より出るや、法性本淸、無明何に依つて起るの確答能はざる如く、

若し如來藏性は宇宙全一の心にして一體なれども、寫象と意志の二屬、卽ち相と用一切知と一切能との二ありて一切能なる意志の力の不識の偏動力が常恒運動の力より絶對より自己內存の相對の方面に發展せられたる故に無明とは不識意志卽ち一切能力の働きなり。

然れば如來藏心無明なりや。曰く然らず。如來心は一切知と能とを有す。然れども力によりて展せられたる世界また世界より展生したる衆生が外的生活を先づ發達せんが爲の業用なれば、先に陳べし如く絶對心の意志（一切能力）が第二世界性には一大元氣として活氣をなし第三衆生性としては生理的衝動となる。絶對一大意力が世界は相對の故に一大元氣が陰陽二性となり。萬物を發生し、第三衆生には生理衝動が雌雄

兩性となりて自己と同種を分出す。

無明及煩惱の、根本無明は一大不識意志の力、第二は世界の一大元氣、第三は不識生理衝動である。

還相

今本覺不思議の薫力に因て厭求の心を起す、また眞心所流の聞薫に敎法不覺に薫するに因て體同用融するを以て彼聞薫を傾し性解の力を益し無明の能を損して漸く心源に向ふ。始滅相を息、終に生相を息、朗然として大悟、心源を覺了する本無所動、今始めて靜なることなし平等にして始覺の異なし。

今日く、第一の神性が第三衆生性と轉展するも自己根底は第一の分なれば內的不可離の因あり。展せられて衆生我の遠心力が肉を愛し肉の生活のみを中心とする故に、世界の方面卽ち感覺の方にのみ依屬して自觀的に直觀界絕對の神の方に向つて知を得べき自己の本性を悟らず、故に本覺の求心と合一する能はざりき。無明生理衝動の我の方よりは心靈の方に直觀的に神の方に向ふて絕對の本覺と合ふことを得。心源を覺らば本所動なし。今始て靜なるにあらず、實に神の一切慧と相應するは直觀的に宇宙の內的自存を悟るなり。然る時自己の本覺が顯現す。其方面には生滅變化なし。

宇宙二面

絕對の二の屬性一切能の意力發動せられ常恆に偏動する方は生住異滅常恆運動の故に息むことなし。是吾人が經驗する自然界卽ち感覺方面なり。意力の常恆偏動の故に世界及び衆生は四相遷流して止まず、是常恆建設生成造化と云ひ得べし。

一方は一切慧の方面にして吾人が直觀の對象にて常住不變四相に遷されず、此方面に常に常恆涅槃靈界を發見すべし。是諸佛陀は此方面に常恆に安住す。諸の凡夫は偏

動四相遷流の感覺界に依止す。

覺に本覺始覺

本有永恆心體法界一相如來平等法身を本覺と爲す。

始覺とは本覺の體より分展せられ衆生界に展現したる衆生が本有の靈性が漸次に向上し竟に靈性開顯し來りて、觀ずれば始覺と本覺とは本來一體之を心源を覺せる究竟覺と爲す。

世界觀二面

世界と人生とに對する觀念に二樣あり。甲は世界は全く眞に背き妄に隨ふ無明罪惡生死、衆生の所感なる世界の故に人生と共に神に對せば其性反對なる質なれば全然厭忌して侘に眞に順ふ方面を求めんにはと世界と人生とは之を厭離して淨き方面を欣ふべきものとす。

乙は謂へらく世界及び人生はもと神の物にしてまた神の子として人生は尙進んで高等なる神の世界に昇進すべき階級とし準備として必ず履ざるべからざるもの、世界は其敎場なり。人生は神の國に入らんとする豫備科の學校なり。敎祖及び宗敎家は敎師なり。種々の災厄苦難は是策勵の鞭なり。人生快樂を目的とする如きは非なり。また厭世者の如きは愚痴漢なり。

神より賦せられたる本性を全力を竭して發揮しまたに靈化し煩悶を化して菩提とし生死卽涅槃と悟る。人生八十年卽ち義務敎育の時日なり。焉んぞ千百年を要するあらん。世界の萬物の裝置は悉く己を磨くの機、惡人の罵詈讒謗も打擲も心を鍛練するもの、何そ之を避けんとする。己を全ふせんが爲に寧ろ甘受すべきなり。

一日は淨土に於ての百歲に勝れたり勇猛精進に修して唐損するに忍びず。

此豫備の課業を卒るの時は必す目的の高等なる如來自性の靈界に到達す。然り而して此主義は精神主義なれば自然界と靈界とは其途に必ずしも十萬里を隔てず。淨土と穢土とは本來同一の彌陀身心内の兩方面なれば、衆生の精神に感覺と直觀との二面に於て、感覺は自然界を直觀は靈界と接せり。然らば死して後始めて極樂たるにあらず一面に是紛々擾々たる爛漫たる五濁の中に奮行し、炎黑燻たる精神をば觀念裡に常寂光の靈界に逍遙して八功德水に神を浴す。世は益生存競爭激しきに進むに速度急なり然れば則ち一方に精神を逍遙せしむる神秘の靈界を發見して之に依て優々と靈を養ふにあらざればとても勝利は望むべからず。

自然と靈界とは同一の彌陀身内にして、一方は修行奮闘の方面、一方は精神休養の爲め、而していよ〳〵卒るの日は永遠に神と共に樂しみ理想の靈界は全く實現す。

事に觸れ緣に對して苦悶しまた悲觀を懷く如きは修業未熟の致す處、寧ろ愧づべきなり。益奮發勵行せば既に純熟する時は日日の業務いかなる事に對しても放て畏るゝなくまた憂なく不足なきにいたる。よく努めよ。

三　性

一、圓所實性。如來自性、絶對無規性、如來心、

如來自性は因緣因果等の相待規定せられて成れるにあらず。絶對無規定の一圓を云ふ。自然法爾に成るを云ふ。萬物にありても變らず永遠に變せず故に眞實本有の自性實性と云ふ。卽ち神性卽ち如來自性なり。

二、依佗起性。相待規定。世界性。如來藏心。

實性卽ち神に一切知と能との屬性ありて、天則秩序となりて自然界の方面に向て萬物を開展するは、一切能の力によりて發生せらる。自らの力にあらずして相待に規定せられて成長す。故に是世界普偏的の性なれば是を世界性と名づく。

三、分別起性。個々差別。衆生性。

世界因緣に規定せられ因果に約束せられて複雜極りなき相待規定より成立し、衆生の性は千差萬別各々特殊なる性をうく。本世界に規定せれたるこの性なれば因緣に隨て轉變し常定性あるなし。

神が天則卽ち法身如來來藏性より自然界に向て開展するには平等全一より差別また複雜極りなく開展す。

實性は性智。世界性は賴耶識。

第一義如來の自性は大圓鏡智本然の光明徧照十方。世界性は第二義相待規定、第一二を合して如來藏性と爲す。第三分別衆生性は依他成所の心を賴耶識とす。

衆生の所依、卽ち衆生が自然に此世界に生を受け、世界の自然律なる因緣に約束せられたる上に自己を認め、己の人生の依止する所は卽ち自然の世界にあるものとす。俗に所謂天なり。自己の全幅を天に依屬する外なきを信ず。

而して世界天則に自然に規定せらるゝ生理的精神の賴耶は先天的に自然に依止し自然己上に自己の運命を依屬すべき所體のあるを悟らず。世界相待規定の世界には本より因緣所成なれば其根底は自己にあらずして自己は因緣によりて成し因緣謝すれば離るべき性なるを覺らず。

自己の要求の幸福を此自然に期す。而して世界は我に幸福を與ふる親として依屬せしも、因緣約束は緣に隨て轉變し自己の要求は世界性にてはいかんとも成し難し。只自己が進んで實行せば其因に報ゆる果あり。複雜なる因緣より成立せし自己の運命なれば甚た要求は容れがたし。緣謝すれば謝す。永遠の平和常住の生命の安心は、自然の佗に求むべきを自覺し、世界は第二位にして、第一位の上に立たる第二位にして、絶對に依屬すべき性あるものにあらざるを自覺し、進んで第一位の絶對無規定なる神に依止するの眞理なるを信認す。

大正十三年十月十日印刷同月二十日發行